

役に立ちたい

上條 智恵

助産婦(東京都新宿区)

助産婦学校卒業後、12年間働いた産婦人科病院を退職して4か月が過ぎました。結婚して住む場所や同居する家族も変わり、仕事も休止中です。今までとは全く異なる生活にもようやく慣れてきたところです(料理作りには悪戦苦闘しています)。振り返ると、助産婦として働いた間にはいろんなことがありました。そのなかで、「援助」について考える機会もありました。

人の役に立ちたい

私はクリスチャンです。小さな頃から、将来は人の役に立てる仕事がしたいと思っていました。人の役に立てる仕事=看護婦という単純な考えで、看護婦の道を選び、最終的に助産婦になりました。助産婦になってからも一生懸命働きましたが、すぐに出る結果をみて、自分が満足し、人の役に立っていると自負していたように思います。そんな時に私が通っていた教会で、キリスト教系のNGO(民間援助団体)の活動を知りました。そのNGOは主に、第三世界の国の人たちを対象に援助を行っていました。

以前私が高校生の頃、エチオピアが大旱魃に襲われ、そこから大飢饉がおこっていました。そのことは日本のマスコミでも取り上げられ、栄養失調の子供たちがテレビに映るとつらい気持ちになり、何か私にもできることはないかと思っていました。ただ、報道される第三世界の情報は、旱魃などの突発的なことがおこった時のみで、慢性的にある貧困などは報道されません。なので私は、食物や医薬品、衣服などの「供給」が、主な援助の

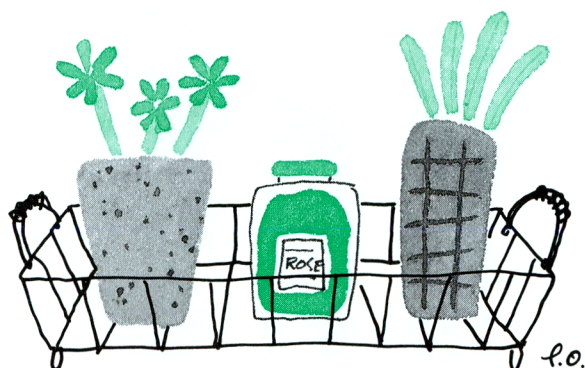
方法だと思っていました。

しかし、そのキリスト教系のNGOの活動内容を聞いていると、食物や医薬品、衣服などの供給は、活動の中のごく一部であることがわかりました。第三世界の国々の貧しさは、先進国といわれている私たちの国にも原因があることを聞き、「供給」以外の援助の方法を知りたいと思うようになりました。

海外ワークキャンプ参加

勤務して6年目、平成6年の夏に約3週間の休みを取り、そのNGOの海外ワークキャンプに参加しました。場所はインドのカルカッタ。市内の貧しい子供たちの通う学校の運営をNGOがサポートしていました。学校に寝泊りさせてもらい、授業の様子を見学したり、子供たちと交流しました。

子供たちの家庭は本当に貧しく、学費や学用品などの費用も出せません。学校やNGOからの援助がなければ、学校に通えない子供たちばかりでした。親たちも学校に行かなかった人がほとんどで、文字を読むこともできませんでした。親たちの職業は、人力車の運転手やドブ掃除人などでした。人々の貧しさは、突発的ではなく慢性的なもので、不足している物品を供給するだけでは、援助を止めたとき、再び同じ問題がおこります。そこで、私たちのNGOでは、必要な物品を供給するだけでなく、子供たちが教育を受けることで将来につなげていくという方法で援助の手を差し伸べていました。



学校では子供の入学者の選択を、希望する親の面接により選んでいました。貧しい親の子供から優先されるようになっていました。子供たちは知識を得ることで、将来への夢を持つことができていました。卒業した子供のなかには、実際に夢を実現させた子もいました。キャンプ参加中に学校入学希望者の面接に立ち会うことができました。そのとき就学していない地域の子供たちに会いましたが、落ちつきがなく、表情も乏しく、就学している子供たちとは明らかに違い、教育を受けることの重要性を目の当たりにしました。日本では小中学校への就学は義務となっているので、教育は大切なことだと頭ではわかっているのに、実際には理解していなかったことを痛感しました。カルカッタで子供たちと短期間でも過ごしていく中で、「教育」によって原石が磨かれてピカピカ光っていくさまをみるのができたようでした。

数年後、やはり同じ海外ワークキャンプで、アフリカのウガンダに行きました。小さな村での小学校作りの手伝いをしました。ウガンダではエイズが蔓延していて、エイズ孤児が多くいました。その子供たちも含めて、村の子供たちが教育を受けられるための学校が必要でした。

ウガンダでは、地域の人たちと共に働くことを学びました。小学校の校舎の壁を作るために、バケツで泉から水をくみ出し、その水を運んで粘土をつくり、型にはめてレンガを作るという作業を、村の人たちと共に行ないました。私たちが経験したことがない、ということもありましたが、

方法はすべて村の人たちのやり方で行なうのです。もっと早く小学校の校舎を建てる方法はあると思いますが、次回からも村の人たちの力だけで校舎作りが行なえるような援助の方法でした。力仕事で体力的には大変でしたが、村の人たちに方法を教えてもらいながらの作業は楽しく、食習慣も生活習慣も違う人たちとの生活はとても興味深いものでした。

NGOの援助と助産婦の仕事

NGOのキャンプをとおして、第三世界への援助方法は私が思っていた必要物品の供給だけではなく(それも大切ですが)、各々の国の人たちが自分たちで自立していくことができるような援助が大切であることを学びました。そして、援助の結果はすぐに出るものばかりでなく、長い年月がかかることも知りました。

助産婦の仕事とは関係なくNGOの活動に関心をもちましたが、ワークキャンプで感じたことは助産婦の仕事にも影響が大きかったです。「人の役に立ちたい」というそれまでの私の思いはかなり単純で、すぐに出る良い結果を出すことで自分の満足度を上げようとしていました。しかし本当に人の役に立つ、ということとはもっと複雑で、今まで私が行ってきたどんなことよりも、もっとやりがいがあると思います。これから新しい環境の中で再び助産婦の仕事を再開するときに、学んだことや考えたことを具体的な方法へと変えていかれたら、と思っています。(かみじょう・ちえ)